

飛田今昔

沖野奈加志

「『あそぶ』言うたら何があるやろ」本誌編集長さんが言うので、「女郎買いやな」と一ぱい気げんで言うたのが運のつき、「そんならそれを書いてくれ」ということでヤケクソで書いてみよう。

むかしむかしのこと

昭和一ケタはじめの生れ、野球は禁止、甲子園球場で、軍事教練模範演習大会などというものをやっていた時代、お宮さんの境内で相換大会やるぐらいしか楽しみのなかったその頃、若い者が何人か集って「あそびに行こか」といえば、ポケットの中のかくし袋から親にないしょのヘソクリを出して、足らん奴にはゆりずりし合って、「ビタ」（とびたの

こと）へ関西線八尾から天王寺へ気車で遠征したものだ。

花代（なんで花代というのか、芸者は線香代というが、これは線香一本燃える時間であそび代をきめたので、お女郎さんなら「花開き代」という事だろうか）、とにかく花代三十銭で遊廓では一時間が四十分という仕来りであった。

一人五十銭あれば遊んで往復の汽車賃がまかなえたのだ、米が一升二十五銭ぐらいだっ

た。米一升余りの金で遊廓へ上れたんだ。

ちよっと参考までにつけ加えておくが、江戸時代末期から明治のころ、今の津守の高速道路の下にあった十三間堀川に、びんしょ舟というのがある。舟の中で遊んだという。びんとは一のこと、びんしょ（一升）の金で遊べたのだ、江戸のお千代舟、古くは室津（岡山）のおちよろ舟のたぐいだ。

さて、数人の河内のガキ共が上る、同数の女の子が来る。誰だって若い子、ちよっとでもベッピンさんがほしいが、中にはおふくろさんぐらいいれば、胸の病いかヤセコケてゴホンゴホンもいる。なんでこんなベッピンさんが女郎してるのやろと思う位の今ならミス何々クラスもいる。

みんなそれぞれかなしい運命を背負って売られてきたんだろ、そういうことがわかって社会の仕組みに怒りをおぼえるようになるのは、それから数年来戦争が終ってからのことだ。

客引きのやり手ばあさんの口ききで、クジ引で敵喝（あいかた）をきめる。

シメツタせんべいとまじい茶で一しきりバカ話をしていると、大てい年増の女が「あそぶ」と言う、それを合図にそれぞれうす暗い窓の小さな（これも女が逃げんようにしてある）四畳半へ入る。

年増のねえさんなんかに当たると、いきなり服をぬがされ、まるで幼児が風呂へつれていかれたようなもの、まごまごしていると「あんたあんまりあそんだことないのね、マズベーは体に悪いよ」など説教されながら、あつという間にあそばれてしまう。

あるとき友達に内緒で一人で遊びに行ったことがある。やり手ばあにムリヤリおしつけられた女が、どうも元気がない。「お前病気とちがうんかい」気になるから聞くと、「四、五日前からカゼ引きと腹痛でお茶引きやねん」という。客をとれなかったことをお茶引きというが、メシも満足に食わさんらしい

のだ。あとでわかったことだが腹痛というの

が生理日のことで、生理の出口を売る商売で生理休暇もない。海綿をオクにつめてでも商売するというのが。そうしないと拘え主の借金（休んだら室代までとられるという）がふえるばかりだという。

苦界に身を沈めるといふ話はこりいうことかと身につまされた。

つい同情して「うどんでも食いか」といってしまったのが、世間知らずの若気の至りええかっとするもんじゃないと身にしみるようになりどんを食わされることになる。

「帳場を通さんとあかんのよ」と女が障子をあけて「おばちゃん」と呼ぶと、「何や、まだやってへんのかいな」とか言いながらやり手ばあがやってくる。「なべ焼うどん二つ（あれつとびつくりの当方に向って）おばちゃんにもチップ上げて」わしゃキツネのつもりやったのに。

帳場を通すという手続で、値段が二倍にな

り、十銭のチップをとられ。

「あんたみたいに親切な人始めてや、若いのによう気がきいて、きつと出世しはる。ウチ好きになつてしもた」

ああ手練手管とはこりいうことか、

「遊女は客にほれたと云い、客は来もせでまた来るといふ、ウソとウソとの色里で：浪曲を地で行くようなこともあった。

四十分足らずで「またあそびにきてね」と送り出され、余った金があれば「一銭洋食」（クシカツ）とひやしあめをのんで汽車にのる。戦争の暗い谷間にはまり込んでいく、何のあそびもなかったころのこと、編集長にあそびと言われて女郎買いと答えたのは、はじめの方で書いたとおり若い者があそびに行くかと言えば遊廓であり、「あそぶ」とさいそくされてあそんだ、そのことが、あそびを知らぬ年代のあそびであったからである。

「真空地帯」